

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	尾曲 巧
学位論文題目	アメリカの外交思想と小笠原統治 ―善悪二元論的人種差別―
<p>本論文は、アメリカ思想の起源をカルヴィンの宗教改革にまで遡り、よりその本質に迫ることを試みたうえで、その思想から生み出されたアメリカの外交思想の形成を通観し、それに基づいた行為が小笠原島民に及ぶに至り、彼らの運命を翻弄し悲劇的な非日常をもたらしたことを論述したものである。つまり、小笠原島民の経験した歴史を欧米のキリスト史と日本の国家神道という大きな枠のなかに位置づけ、それぞれの宗教が育んだ社会思想、外交思想が孕む人種差別、特に、アメリカの善悪二元論的人種差別に抵抗して力強く生きてきた島民の姿を提示した、先行研究に類のない、小笠原の歴史社会学研究である。</p> <p>第1章は、アメリカの善悪二元論の起源をカルヴィンの宗教改革まで遡り、17世紀初頭のアメリカの植民以来、原型としてのヨーロッパ社会が存在しなかった環境のもとで、どのように特異なものに変容し外交戦略に適応されていったかを見る。カルヴィニズムの中でも特に善悪二元論の起源となりアメリカの近代化・世俗化の推進力となったのは、人の死後の天国・地獄への運命は生れる前から神により予め決定されているという二元論的「予定論」だった。アメリカ文化の精神的基盤を築いたピューリタンの人々と最初に接触したのは先住民インディアンである。ピューリタンが彼らに対して最初に行ったことは、インディアンを人間ではなく「絶対的他者」とカテゴライズすることでアメリカを無人化し彼らの安住の地とすることだった。19世紀になると国内での領土拡大はアメリカが神に託された「明白な宿命」とされ、西漸運動に拍車が掛けられた。さらに、19世紀後半には、ソーシャル・ダーウィニズムの理論はピューリタニズムの善悪二元論を科学的理論として補完し、アメリカの帝国主義論、人種差別を正当化する理論へとすり替えられ、以後、「明白な宿命」思想は国外へと向けられた。</p> <p>第2章は、1830年にイギリス人やアメリカ人など欧米系の人々とカナカ人が小笠原に移住してきて先住民となったが、時代は折しもイギリスをはじめとする欧米列強がアジアに触手を伸ばし帝国主義的膨張政策を展開していた頃であり、アメリカが自らを善という前提でヨーロッパ諸国を悪と見なしアジアでの覇権を狙っていたことを検証する。その最前線にあったのがペリー提督であった。彼と本国政府は蒸気船による大圏航路の実現を目指しており、その中継地点である日本の開国を図り、蒸気船の燃料である日本の石炭に注目していた。ペリー提督は</p>	

日本にとっては屈辱的な恫喝という手段によって日本を開国させた。小笠原は貯炭所及び水、食糧等の補給基地として重要な位置にあり、ペリー提督は島を植民地化し法を適応させた。

第3章は、欧米列強に遅れて近代化に取り組んだ日本が、国家神道という明治維新以後戦略的に形成された思想を拠りどころとして特異な国家主義を形成していったこと、その中でももと天皇の版図ではなかった小笠原諸島が日本化され、第二次世界大戦という悲劇に巻き込まれたことにより島民が長年に及ぶ苦難に陥ったことを考察する。日米間の戦争の遠因には、日清・日露戦争により日本が帝国主義国家として欧米列強に比肩するほどまでになり、アメリカの中国大陸進出を阻んだことにある。その1例として、日露戦争直後アメリカからの満州共同経営の誘いをポーツマス条約の全権大使小村寿太郎外務大臣が拒否したことを取り上げた。

第4章は、小笠原島民が長年にわたってその血を二つに分けられたが、その両島民の生活の実態を検証する。帰島を許された欧米系島民は占領軍の朋友となり、一方の旧島民はかつてのインディアンと同じように悪と見なされ無きがごとくに無視された。帰島後の欧米系島民は物質的に恵まれアメリカ市民に近い待遇にあったが、本土に残された旧島民のほとんどは貧困にあえぎながら、帰島運動に一縷の望みを託していた。この対照的な島民の生活の背後にはアメリカ軍部による返還への抵抗、特にラドフォード提督の行為が大いに働いていた。

第5章は、1952年の講和条約により日本は連合国による軍事占領と支配から再独立したが、その後の日米二国間レベルの小笠原返還外交交渉の展開を2002年以後公開された極秘文書をもとに検証する。1952年以降の小笠原諸島の施政権の返還交渉は、アメリカ軍部、特にラドフォード提督の抵抗により困難を極め、旧島民の帰島が1人として許されないことは日本側にとっては人種差別と見なされることだった。日米両政府による交渉は、旧島民への一括補償と返還数年前の墓参にとどまった。返還が実現したのは、日本の政治環境が安定し経済成長を果たし国際的地位が向上した、昭和43年、佐藤内閣の時であった。

第6章は、1968年6月26日に小笠原諸島は日本に復帰され同時に欧米系島民の地位も確認され、政府による再開発が本格的になされたことを紹介する。23年の統治の間アメリカによる島のインフラ整備は皆無に等しく、島は農地を初めジャングルと化していた。また、23年という断絶は旧島民にとってはあまりに長く、本土での生活基盤が築かれたために大半は帰島することはなかった。戦前に比べると島はいまだにマンパワーが不足しており、自給率は極めて低い。復帰後40年間の再開発にもかかわらず、島の産業は戦前の活気からはまだ程遠いものである。そこで、島の豊かな自然と島内自給率を高めることによる観光産業の活性化、また、ハイ・シナジー社会の創造による新たな島民のアイデンティティの確立により、持続可能な島の未来社会の創造を提案する。

平成21年2月5日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 尾曲 巧

学位論文題目

アメリカの外交思想と小笠原統治—善悪二元論的人種差別—
(American Foreign Policy and the Bonin Islands- A Target of Manifest Destiny:
Racial Discrimination in Terms of the Principle of Good and Evil)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

本論文は、アメリカ思想の起源をカルヴィンの宗教改革にまで遡り、その思想から生み出されたアメリカの外交思想の形成を通観し、それに基づいた行為が小笠原島民に及ぶに至り、彼らの運命を翻弄し、悲劇的な非日常をもたらしたことを論述したものである。

つまり、小笠原島民の経験した歴史を欧米のキリスト史と日本の国家神道という大きな枠の中に位置づけ、それぞれの宗教が育んだ社会思想、外交思想が孕む人種差別、特に、アメリカの善悪二元論的人種差別に抵抗して力強く生きてきた島民の姿を、近年公開されたアメリカの外交資料や現地での調査・インタビューによって提示した、先行研究に類のない、小笠原の歴史社会学研究である。

2. 論文の構成

第1章、アメリカ外交思想の特異性

第2章、「明白な宿命」とベリー提督の恫喝外交

第3章、日本近代化の中の小笠原諸島

第4章、アメリカ海軍統治下の欧米系島民のアメリカ化

第5章、小笠原諸島返還交渉

第6章、返還後の小笠原諸島

第1章では、アメリカの善悪二元論の起源をカルヴィンの宗教改革まで遡り、17世紀初頭のアメリカの植民以来、原型としてのヨーロッパ社会が存在しなかった環境のもとで、どのように特異なものに変容し外交戦略に適応されていったかを論じている。特に、19世紀後半には、ソーシャル・ダーウィニズムの理論はピューリタニズムの善悪二元論を科学的理論として補完し、アメリカ帝国主義論・人種差別を正当化する理論へとすり替えられ、以後、「明白な宿命」思想は国外へと向けられたと論じている。

第2章では、19世紀半ば以降、欧米諸国がアジアに触手を伸ばし帝国主義的膨張政策を展開していた頃、アメリカは自らを善という前提でヨーロッパ諸国を悪とみなし、アジアでの覇権を狙っていたことを検証している。

第3章では、欧米列強に遅れて近代化に取り組んだ日本が国家神道という明治維新以後戦略的に形成された思想を拠りどころとして特異な国家主義を形成していったこと、その中でもともと天皇の版図ではなかった小笠原諸島が日本化され、第2次世界大戦という悲劇に巻き込まれたことにより島民が長年に及ぶ苦難に陥ったことを考察している。

第4章は、小笠原島民が長年にわたってその血を分けられたが、その島民の生活の実態を検証している。この章は、尾曲氏が現地で調査・インタビューに基づいて論じたものであり、先行研究には見られないオリジナリティに富むものである。

第5章では、近年公開された米国の極秘資料をもとに、返還交渉を論じたものであり、ラドフォード提督の行為が大いに働いていたことを明らかにしている。

第6章は、小笠原諸島が1968年6月26日に日本に返還後に制定された「小笠原群島振興開発特別法」にもとづいて実施されている振興開発事業をとりあげ、小笠原諸島の今後の方向性について論じている。

3. 評価すべき点

尾曲氏の論文は、①アメリカの外交政策の思想的根源と通史的展開を論じた興味深い論文である。②先行研究の主要なものは的確に批判的検討を行なっている。③近年公開されたアメリカの極秘資料を精読し、小笠原諸島の返還交渉過程を明らかにした。④小笠原に関する先行研究が少ない中で、現地に赴き資料収集や調査・インタビューに基づいた研究にはオリジナリティが認められる。今後の小笠原研究に資するところが大きいであろう。

4. 問題点と今後の課題

本論文には、①アメリカ社会自体が善悪二元論的なピューリタニズムに覆われていたわけではないだろう。その克服と批判の歩みを論じる必要があるのではないかと、②2つのテーマを1つの論文にまとめているので、展開があいまいになっている。③アメリカの宗教、文化について述べているが、外交政策をどのように定義するのか。④引用が長い、⑤資料

批判がなされているのか、などの問題点が指摘される。

5. 総合評価

以上に述べてきたように、種々の問題点や残された課題もあるが、多くの評価されるべき点を有していると評価することができる。従って、本研究科の博士学位論文に値すると判定する。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 ☒ 合 ☐ 否

審査委員

主査 (氏名) 皆村武一

副査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 原口 泉

副査 (氏名) 松尾 式之

副査 (氏名) 木村 朗

平成21年2月5日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 尾曲 巧

学位論文題目

アメリカの外交思想と小笠原統治—善悪二元論的人種差別—

(American Foreign Policy and the Bonin Islands- A Target of Manifest Destiny:
Racial Discrimination in Terms of the Principle of Good and Evil)

最終試験の概要

学位（博士）論文に関する最終試験を平成21年2月5日に行った。審査は、冒頭に申請者による学位申請論文の内容説明があった後、それぞれの委員から質問や問題点の指摘がなされ、申請者はそれに対する応答を行なうという形で進められた。

尾曲 巧氏の学位申請論文「アメリカの外交思想と小笠原統治—善悪二元論的人種差別—」は、アメリカ思想の起源をカルヴィンの宗教改革にまで遡り、その思想から生み出されたアメリカの外交思想の形成を通観し、それに基づいた行為が小笠原島民に及ぶに至り、彼らの運命を翻弄し、悲劇的な非日常をもたらしたことを論述したものである。

つまり、小笠原島民の経験した歴史を欧米のキリスト史と日本の国家神道という大きな枠の中に位置づけ、それぞれの宗教が育んだ社会思想、外交思想が孕む人種差別、特に、アメリカの善悪二元論的人種差別に抵抗して力強く生きてきた島民の姿を、近年公開されたアメリカの外交資料や現地での調査・インタビューによって提示した、先行研究に類のない、小笠原の歴史社会学研究である。

委員から、①アメリカの外交政策の思想的根源と通史的展開を論じた興味深い論文である。②先行研究の主要なものは的確に批判的検討を行なっている。③小笠原に関する先行研究が少ない中で、現地に赴き、資料収集や調査・インタビューに基づいた研究にはオリジナリティが認められる、などの評価がなされた。

他方においては、①アメリカ社会自体が善悪二元論的なピューリタニズムに覆われていたわけではないだろう。その克服と批判の歩みを論じる必要があるのではないか、②2つのテーマを1つの論文にまとめているので、展開があいまいになっている。③アメリカの宗教、文化について述べているが、外交政策をどのように定義するのか。④引用が長い、⑤資料批判がなされているのか、などの問題点が指摘された。

また、最終試験では、審査委員の質問に対し明確な回答が得られ、かつ、当該分野における知見が十分であると確認された。

以上により、博士の学位を与えるのに十分な学力と見識を有するものと判定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 ☒ 合 ☐ 否

審査委員

主査 (氏名) 皆村武一

副査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 原口 泉

副査 (氏名) 松尾 茂之

副査 (氏名) 木村 朗